

自由研究発表

デザイン民族誌の可能性を探る
—バンドン工科大学デザイン民族誌ラボとの共同検証から—
Exploring the Development of Design Ethnography:
Through the Collaborating Trial with Design Ethnography Lab. in ITB

鏡味 治也 (金沢大学)

Kagami Haruya (Kanazawa University)

本発表では、「デザイン民族誌」という日本ではまだあまり馴染みのない領域の内容を検討し、発表者が専門としてきた文化人類学の立場から、その発展の可能性と方向性を提示してみたい。

デザイン民族誌は、民族誌的手法を取り入れたデザイン開発である。デザインの領域で文化人類学的調査を取り入れる試みは1960年代に欧米で始まり、80年代には人類学者との共同作業による製品デザイン開発も試みられるようになった。そして2000年前後にはデザイン民族誌という新たな研究領域が確立されるようになり、教科書 (Müller 2021 等) も出版されている。

発表者は2012年から開始した金沢大学人間社会環境研究科リーディング大学院プログラム「文化資源マネージャー養成プログラム」で、バンドン工科大学芸術デザイン学部卒業生を定期的に受け入れることになり、デザイン学の素養をもつ学生に文化人類学的視点で現地調査を行うよう研究指導することを積み重ねた。その結果学生が仕上げた博士論文は、まさにデザイン民族誌的な調査研究成果となった。

発表者の指導した学生が学位取得後インドネシアに戻り、何人かが母校ITBの教員となり、2019年にはデザイン民族誌ラボトリウムをITB内に開設し、学生を教育し始めた。発表者はそのラボトリウムと共同で、デザイン民族誌の発展に寄与する調査手法の共同開発と検証を目指す5年間の調査資金を得ている。

本発表では、デザイン民族誌の下地となるデザイン学と文化人類学がどのような関係にあり、その二つの領域をつなぐ接点をどこに求めればいいのかを検討し、ふさわしい調査技法について提案する。先取りして言えば、対象とする人びとの動作への注目がその鍵となる。道具と動作の相関関係はデザイン学ではエルゴノミクスとして探求されてきた一方、人類学も動作に関する社会文化規範はかねてからの研究対象だった。この動作を体系的に記述し分析できる手法を開発することが、デザイン民族誌の発展につながる道のひとつではないかと、現時点では構想している。

Müller, Francis (translated by Anna Brailovsky), 2021, *Design Ethnography: Epistemology and Methodology*, open access publication.